

2025/7/30

中経論壇

経営支援助NPOクラブ
広報担当

井上 真己子



上司だと思い込んだのではない。
か。

面白いことが立て続けにあった。新宿南口の信号待ちで、80歳前後の女性にふとしたことで話しかけられ、2年前に先立った夫の介護がいかに大変だったかという話になった。信号が変わり、渡り切ってからもしばらく話が終わらない。「ところで今日の用事は」と聞かれ、元上司が異動するため送別の品を買いに来た、と答えると、彼女は「ご主人さまは何歳？」と問う。突然の話の流れの中断に戸惑ったが、あとで気付いた。「私の」元上司を「夫の」元

男性か女性のいずれかが、必

選択的夫婦別姓問題を考える

ず姓を改めなければならぬ。現実には、女性が改姓する場合が圧倒的に多いため、女性の地位の問題と重なる。政府が本格的な議論を始め、既に30年あまり、筆者の周りには旧姓を通称使用する女性が増えた。パスポートや運転免許証への旧姓併記もできるようになった。

しかし、問題の解決には程遠い。税金関連や銀行口座に関する手続き、また渡航の際には、戸籍名と違うため手続きがでなかったり、本人であることの証明が煩雑であったりする。仕事や研究の実績を継続するため旧姓を使用しても、法的な氏名ではないのでさまざまな不便が生じる。特に海外でやっていると、いくつかは困難だとい

別姓に反対する立場は、夫婦同姓が社会に定着した制度であることのほか、家族の一体感に関わると指摘している。確かに制度を変更するには、さまざまな課題があるのも事実である。しかし、家族の一体感についてはどうだろう。夫婦別姓を認める諸外国の人の家族間の愛情は希薄だろうか。

改姓や旧姓の通称使用によって、実際の不便や不利益が生じるだけでなく、姓は自己のアイデンティティにも関わっている。全ての人が、自分の人生の主人公として生きられる、そういう社会の制度であってほしいと思う。もうそろそろ、古い家制度の考え方を改め、憲法がうたう両性の平等の精神にのっとり、結婚の際、同姓か別姓かを選べる制度の導入を急ぐべきではないだろうか。

人生の主人公であるために